

末黒野

すぐろの



7月号

(通巻923号)

木橋

森清堯

かたかごの風を生みたり柚の径
畔焼の煙二筋川挟み
しばらくの水脈の幾筋鴨帰る
湾よりの風のほぐれて初桜
弾みたる妻の包丁春キャベツ
やはらかき風の形みせ糸桜
蔵窓の開け放たれて鳥の恋
谷底の昂る音や惚芽吹く
池に立つ女神の像や花の影
北岳の頂浮かせ花の雲
せせらぎの三步の木橋濃山吹
はこべらや風やりすごす丈揃へ

花の行方

岡野里子

日を返し風をとらへて雪柳
海光へなだるる白のもくれんげ
夕さりの川面明かりや初桜
暮れ泥む街の川岸若桜
初花や稚に見しよとて乳母車
ひと片の花の行方や風の道
ゆるゆると巡る寺領や蝮の道
鶯や植物園は萌黄色
門川を笹舟流る竹の秋
糠雨に色を崩さず里桜
風和ぎて岸を離れぬ花筏
老桜満ちて淋しき夜なりけり

瑞声

空つ風

黒滝志麻子
(顧問)

神杉のしづもる御陵匂鳥
夕霞辿る家路を遠くせり
囀に孔雀鋭き声返す
声高の媪の集ひ花筵
うららかや新米の父嬰を抱き
朧月鬼女の出さうな橋渡る
花冷や猫の集まる家の闇
湧き水に小石きらめく山葵沢

甲矢集

花万朶

森清信子

神鷄の高き一声朝桜
花万朶風に丸みの生れけり
好い年をして酔ふ武蔵野の桜かな
散りぢりのはずが相寄り花筏
岬より沖合ひの綺羅松の芯
晴れ渡る南アルプス初燕
幹の洞深く神代桜なり
桃の花酔へば秘密を言へる友
三歳児すぐに弾くるしやぼん玉
春夕焼天使の羽根のやうな雲

花吹雪

石黒興平

前山をいぶせる野火の走りかな
消えかかる畦火暮色を深くせり
海光に映ゆる家並や風光る
林道を登り来る風花木倍子
突として磴の半ばの初音かな
水音に人声まじり山葵沢
初花や年取るほどに里心
一陣の風一陣の花吹雪
野遊びや呼びもせぬのに牛の来て
啄木の三倍生きて啄木忌

四月馬鹿

太田良一

寄せ書の隅の聖句や春愁
ジーンパンを穿けば青春春の風
乗り換えの右往左往や四月馬鹿
竜天に俺に続けと昇りけり
春深し口を結べる巫女の舞
花冷や仏足跡の水たまり
越の酒つまみは越の蛸烏賊
禅寺の百の説法花の冷
折紙の跳ぬる兎や復活祭
争ひを起さぬ国や蝌蚪の国

ひつらひつら

小田嶋野笛

風よりも空よりも蝶かがやけり
箱出づる雛めいめいの深呼吸
頬染めて箱を出でたる女雛かな
官女雛なかの老女の首傾げ
五人囃子ひとりは桴を忘れ来て
右大臣の温顔ほのと雛の燭
雛壇へ赤ら顔して左大臣
ねんごろに飾るや雛の客いまだ
雛納来し方などを独りごち
春愁や電子時計は音立てず

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



初音

高木邦雄

たまさかの初音に耳を傾けて
舟下り巖彩る山つつじ
残る鴨二羽には広き池の面
日溜りのすみれ一叢雑木山
利根川の早瀬湖行や初つばめ
浚渫の進む水底蘆の角
雲水や笠に纏はる飛花落花

花筏 岡田史女

靴の跡 長尾タイ

しらしらと川面にしだれ桜かな
墓碑銘は愛の一字飛花落花
みたび着る喪服の肩や桜散る
さざ波の寄りて分れて花筏
山藤や空の青さのきはだちて
つちふるや川鶉の遊ぶ舟の上
桜しべ降る寺町のしづけさに

亀鳴くや目覚めて消ゆる夢の数
春愁や砂紋に残る靴の跡
潮の香や胸に沁み入る春の闇
夢を追ふ八十路半ばや月朧
ふらここや余生を語る老の影
田芹摘む妣の教への尽きぬ数
古民家の土間のつつ抜け燕来る

春風 池谷鹿次

水車 今村千年

白雲の浮かぶ水田や田螺鳴く
藤房の吹かるるほどにうねりけり
禁漁区の湖は楽園残る鴨
春風や農具出を待つ納屋暗き
うららかや噴煙止まぬ浅間山
境内は染井吉野の花盛り
松蟬やわびしき声の夕間暮れ

ことごとと水車は春を回しけり
口笛を吹けば野道は春めけり
さくら舞ふきみのかんばせさくら色
むさしののひと日を花と過ごしけり
幼児の帰りは遅々とつくしんぼ
春の空麒麟は首を遊ばせて
何ごとも果てはありけり落椿

深大寺 池乗恵美子

朝桜 大川暉美

夜上がりの朝日に梅の匂ふかな
武蔵野の風よ光よ百千鳥
初花や語りつくせぬ妣のこと
春眠の花洛に妣と遊びけり
波郷眠る古刹の花と仰ぎけり
句碑歌碑へ落花しきりや深大寺
波郷墓碑の古ぶる家紋花馬酔木

せせらぎの辺りに乱れ犬ふぐり
春きて空を灯すや花辛夷
野を行くや春の息吹め暉々として
湧水のつなぐ門川春の蝶
ひと片の句帳へ散りぬ朝桜
堰越ゆる流れの音や風光る
囀の汀女の句碑や坂がかり

青炎集 森清堯選



狭山 沼崎千枝

林間に群るるかたくり日矢の雨

沈丁花のしやべつてをるや夜の路地

落椿踏まれ轆かれてなほ赤し

野へ山へ画帳広ぐる日永かな

花びらは付箋の代はり句帳閉づ

仇討の言ひ伝へあり花吹雪

横浜 上月智子

博文邸の浜の細波牡丹の芽

動かざるビルのクレーン霾晦

寺町や苔を纏へる門桜

花筏浄土の池を揺蕩うて

対岸へ渡るすべ無し花万朵

花朧考の蔵書に覚書

横浜 渡辺富士子

浅春や課外授業の芥拾ひ

あると思ふ知恵と教養四月馬鹿

春雨や御ニューの傘をさす日暮

春暁や十六両の貨車の音

桃の花学芸会の舞台裏

椀に浮く花山椒や旅の宿

横浜 六崎正善

魚影のたゆたひてをり春日影

蒼天に憩ふ辛夷の峠かか

カリヨンの流るる空の桜かな

野の風に自在となりぬ蝶の昼

花屑をまとひて亀の甲羅干し

たんぽぽや地蔵の顔の幼くて

横浜 渡辺美智子

芽柳の風も川面も浅緑

カップ置きふつと見る右手春愁

不思議さう鏡の中の子猫たち

花の雨大地うるほす糧なれば

潮風の汀女の句碑や舞ふ桜

うららかや丸び帯びたる山の背

横浜 市川夏子

春寒や温き湯吞を手でつつみ

白昼の逃水追ふや遠会釈

人満ちて花満ちて些事遠さかる

些かなる疲れもけらく桜狩

紺青の空ゆ加減の花吹雪

花散るや窓辺に風の置手紙

横浜 小池桃代

校風を脱いで軽やか卒業生

桜祭抱くベビーの大欠伸

鶯や二合の米を炊く間

古茶のこく味はふべしと頑固父

両掌もて包む母の手柏餅

老鶯や園児ら真似て輪唱に

横浜 橋場美篤

がらんだうの学生寮や三月尽

花菜風児を呼ぶ母の声音の黄

汽車道の歩みをゆるめ朝桜

出港のドラの音幾つ月朧

風運ぶ桜一片戸口まで

ほの紅き胸咲きの花土手明かり

東大和 谷口律子

春シヨールのスパンコールや退職日

うぐひすの声追ひかけて目の忙し

店先に乾きかけたる春の泥

ゆつたりと停まりをるやう春の川

樹樹の間や鬱金桜のうす緑

花吹雪傘をひらきて歩く人

横浜 根本公子

青空の欠片散りばめ犬ぶぐり

鴨帰る花見る前の静けさに

老幹に湧き出づるやう初ざくら

店先の水の匂ひや初つばめ

花筏乗するは森の妖精か

ランドセルに背負はるるやう一年生

耕 土 集 岡野 里子 選



鍋の湯に和布たちまち海の色

横浜 片岡登志枝

太平洋眼下に収め春大根

横浜 喜田 君江

黒き爪土筆の袴取りてより

のんどりといつものベンチ同じ連れ

老桜園児見上ぐる野島山

遠き日の灸の匂ひや蓬萌ゆ

ドローンの写す色彩りチューリップ

柄杓待つ子らそはそはと灌仏会

逆上がり回るはずなく飛花落下

言ひ分もあらうに飛花の黙ありぬ

パントマイムの駅前広場春の昼

横浜 小林 和世

女学生の脛つやつやと雲雀東風

横浜 小長谷 紘

二ヶ月の赤児を抱くや春動く

旨かりきチンせるのみの春キャベツ

片肘をつけて窓辺や花の雲

酒のあては焼売弁当花筵

比良八荒思ひもよらぬ向きとなり

マスク捨て脳の奥まで春の風

風光る気合を入るる指名打者

花種や今年は何が生れるや

卒業や兄の黒色ランドセル

横浜 玉川 利江

福耳の男子のピアス風光る

狭山 山中 ミツ

シンドモアてふ桜満開異人墓地

春筍のコース料理や奥武蔵

飛花落花青き帽子の園児らに

杜統べて琴の音流れ花月夜

静けさや茶室の床の玉椿

桜薬降るおむすびの天辺に

一服の桜湯の香や外は雨

春セーター胸に流行のアニヌ柄

芽吹きへの雨粒掴む梢かな

横浜 古宇田伸子

薄墨をもて一枚の花便り

横浜 岩崎 藍

雨上がり満開の花生き生きと

白波や裾より染むる桜山

トラツクの居並ぶ木蔭花の昼

雨だれの鼓めく音花の宿

酒蔵のゆらぐ川面や糸柳

走り根や木漏日揺らすすみれ草

春泥をそろりと歩み亀池へ

合格の笑顔のランチ花の席

夕されば白き帯なす雪柳

横浜 廣部 尚美

桜咲いて何はなくとも誕生日

横須賀 小島 澄子

一湾へ向くや万朶の糸桜

チューリップきつと秘密を持つてゐる

遠富士や色づき染むる朝桜

石仏の肩や桜の散りかかり

春満月高層ビルの真上より

地場産の艶あるむすび春の旅

石楠花や友待つ午後ケアプラザ

宛名の字少し曲りて春うらら

紅椿鼻歌交じる犬散歩

横浜 大辻美知女

花曇樹々の奥よりハーモニカ

横須賀 河野 礼子

紅に暮れゆく街や雪柳

連山を薄墨色に山桜

春うらら三年振りに友と逢ひ

朧夜や雲間に光る一等星

遠き日の母の作りし木の芽和

山藤の一房揺れてみな揺れて

空つぼのガレージに舞ふ春落葉

朝掘の竹の子甘し今日も晴れ

春の川浚漕船の小休止

横浜 鈴木 英雄

突風に耐ふる辛夷やたをやかに

横浜 北野 節子

囀や梢々の影動き

春雪に思ひ煩ふ明日のこと

初蝶の迷子のやうや落着かず

黄昏の光ぼんやりヒヤシンス

新入生待つ教室の広さかな

ひとすぢの雲の春色日の名残

春昼や波にたゆたふ舳ひ舟

朝東風や美術館より海見えて